ニュッサのグレゴリオスと
ジョン・ウェスレー (I)

—その完全論における比較研究—

岩　本　助　成

序　論
I　ニュッサのグレゴリオスの完全論
II　ジョン・ウェスレーの完全論
III　比較研究
結　論

序　論

ジョン・ウェスレーは終生，「キリスト者の完全」をテーマとし続け，説教や著述をはじめとして彼の全活動を挙げてそれを追求したと言っても過言ではあるまい。彼は完全の概念を観念的思索において探究しなかった。むしろ，キリスト者生活とは完全——神と隣人とに対する純粋で完全な愛と献身の生活——というゴールに向う過程に他ならないという確信に立って，生涯を貫いてその神学的，実践的追求に終始したのである。彼の神学において「キリスト者の完全」という問題は，イエス・キリストにおける神の救いと内的，本質的な関係を持つものなのであって，彼の神観，人間観，特に罪悪観，更には救拯観などという神学全般にわたる広い展望においてのみ理解され得る問題である。同時に，ウェスレーは精神史上，

幾多の思想の流れを吸収し，それらとの対話，批判と克服などを繰り返して独自の完全思想を形成して行ったのであるから，ウェスレーの神学思想形成における思想史的研究は最も重要な課題である。幸いこの方面の研究もかなり活発に続けられており，宗教改革者たちの思想との関係，ルター派敬虔主義，特にモラヴィア兄弟団との関係，英国国教会内のアルミニウス的傾向を持った学者たちとの関係，英国ピューリタニズムとの関係，ローマ・カトリック教会の完全思想の流れとの関係など研究分野も多岐にわたっている。(1)

本小論は，オリゲネス以来のすぐれたギリシア教父と呼ばれる，第4世紀後半のカパドキアに生きたニュッサのグレゴリオスの完全論を叙述しながら，それとジョン・ウェスレーの完全論との比較研究を行なうことを目的としている。ウェスレーがグレゴリオスの思想に何を負うているのか，又，どのような点で彼を克服していったか，更にそのような思想形成における他の諸思想（例えば改革者たちの完全思想など）とどのような関係を持っていたかを思想史的に考察したいわけである。それによってキリスト教思想史の内的，本質的相関関係と Protestant Spirituality の流れの豊かさが考察されるように務めたい。

Edgar W. Thompson はその著 Wesley : Apostolic Man (London, 1957) において，ウェスレーがいかに初代教会を尊敬の眼をもって眺めていたかを述べている。(2) ウェスレーは教父学者ではなかったが，使徒教父をはじめ後期の教父に至る迄の各著作を熟読した。(3) 彼が熱心に教父を学

註 (1) これらの研究書は枚挙の暇がないが，筆者が最近読んだ好著として，Robert C. Monk, John Wesley: His Puritan Heritage, (N.Y. 1966) G. R. Cragg, Reason & Authority in the Eighteenth Century, (London, 1964) のみを挙げる。

(2) Edgar W. Thompson, Wesley : Apostolic Man, (London, 1957) pp. 21-22

(3) V.H.H. Green, The young Mr. Wesley, (London, 1961) pp. 305-319

んだ理由の一つは，第17世紀後半における教父研究復興の結果，彼らの著作を新版で読むことができるようになり，その結果，初代教会の指導者たちの思想と敬虔な信仰生活とに純粋なキリスト教の典型を見出すに至ったためである。更に彼の良き協力者であった John Clayton がすぐれた教父研究者であったことも，彼が教父思想に接する一助となった。ウェスレーは教職者が自問自答すべき問の一つとして，以下のことを述べている。

> 私は教父たちをよく知っているか。少なくとも初期の高徳の師たちをよく知っているか。私はローマのクレメンス，イグナティオス，ポリュカルポスなどのすぐれた遺著を繰り返し読んでいるか。又，少なくとも殉教者ユスティノス，テルトゥリアヌス，アレキサンドリアのクレメンスやキプリアヌスの著作に眼を通したか。(4)

ウェスレーは又，他の箇所ではバシリウス，クリュソストモス，シリアのエフライム，アウグスティヌスなどの名前を挙げて学びを奨励している。彼はある使徒教父などは決して博学でなく，理解力も豊かでないことを認めている。にもかかわらず彼はこう論じる。

> しかも私は，彼らの著作同様，彼ら自身を心から尊敬する。そして愛をこめて彼らを高く評価する。それは彼らこそキリスト者であるからなのである。……私は彼らの著作に敬意を払う。それは彼らの著書こそ真の純粋なキリスト教を表現しており，キリスト教教理の最も強力な証左を示しているからである。……しかしそれでも彼らは決して次のことを放棄しない。「聖書が約束していることを私は楽しむ。キリスト教が何をしてきたかを，とくとごらん願いたい。そしてこれこそ神の御業であると認めていただきたい」。私は尚一層，彼らの失敗をもすべて含めて，これら古代のキリスト者たちを尊敬する。今日では，そのようなキリスト者は余りにも少ないので

註 (4) An Address to the Clergy, 1756 (Works, Vol. X, p. 492)

あるから。[5]

さてウェスレーは特にエジプトの教父マカリウス（Macarius）に注目した。[6]ところがウェスレーの時代にエジプト人マカリウスの著書だとされていたものが，今日の学界においては疑問視されるに至ったのである。それは W. Jaeger, H. Dörries, H.U. von Balthasar, J. Daniélou, W. Völker など碩学たちに負うところ大である。従ってウェスレーが A. Christian Library（Bristol, 1749-1755）の第1巻に編集したマカリウスの説教集は，W. Jaeger 教授の Two Rediscovered Works of Ancient Christian Literature : Gregory of Nyssa & Macarius（Leiden, 1954）によって，以前そう信じられて来た第4世紀のエジプト人教父マカリウスのものではなく，ニュッサのグレゴリオスから多大の感化を受けた第5世紀のシリアの修道士マカリウスのものであることが明らかにされ，学界の認めるところとなったのである。A History of the Methodist Church in Great Britain（London, 1965）vol. I での好論文において Gordon Rupp 教授が A Christian Library を高く評価し，それが教職や信徒に対する良書であるに止まらず，ウェスレー自身のための書物であったことを力説している点を考慮に入れるならば，ウェスレーはマカリウスの著作を通じて知らず知らずの内にニュッサのグレゴリオスの思想に触れていたことになるわけである。[7]

以上の叙述は決して孤立した推測の類いではない。例えば，ウェスレーはかつてアレクサンドリアのクレメンスに理想的キリスト者の典型を見たこともある。[8]従ってウェスレーに対する教父思想の影響，特にギリシア

註 (5) Letters, Vol. II, pp. 387-388
(6) H. Moore, Life of the Rev. J. Wesley, (London, 1826) Vol. I, p. 292
(7) A.C. Outler (ed.) John Wesley, (N.Y. 1964) pp. 9-33 参照
(8) Letters Vol. V, p. 43

教父の影響はかなり重要な要素を含んでいることが予測されるわけであるが，殊にウェスレーがニュッサのグレゴリオスの思想に何を負っているかは彼らの思想の検討とともに更に明らかにされて行くであろう。

I　ニュッサのグレゴリオスの完全論

紀元第4世紀――それは偉大なる教父たちの時代であった。即ち，西方ラテン世界はアウグスティヌスを生み，東方ギリシア世界にも，オリゲネスの思想的影響を受けつつも彼ら自身の独自な神学思想と実践とを通じて広くラテン世界にまで影響を及ぼして行ったカパドキアの教父たちがいた。その一人であるニュッサのグレゴリオスは，キリスト者生活とはただ単にキリスト教の教義を学ぶことを意味せず，完全に至る救いの道であることを明らかにした。

では彼のいう完全に至る救いの道とは何か，それに至る完全を追求する生活とはどのような内容を持つ生活なのか――以上のような諸問題をめぐるわれわれの考察を，彼のこの課題に関する最も明白で組織的であると言われている De instituto Christiano (Gregorii Nysseni Opera, vol. Ⅷ/1：Gregorii Nysseni Opera Ascetica ediderunt W. Jaeger. J.P. Cavarnos, V.W. Callahan；Leiden, 1952）をひもときつつ考察し続けたいと願う。

1. De instituto Christiano の基礎概念

> この恵みによって，人間を偽瞞している妄想を追い散らし，肉に伴なう汚れ多い偏見を絶滅し，真理の光と知識（gnosis）を受けた魂によって，神への道，救いへの道が切り開かれるのである。（p. 41：18）

これは本書の冒頭に出て来る言葉である。グレゴリオスによれば，キリスト教とは魂がすべての物質的束縛から分けられ解放されて，神へと復帰

して行く秘義である。神は最高の存在であり，善であり，宇宙に示されているあらゆる善の原因である。人間は神の似像に創造されたが，その自由意志によって善の代わりに悪を選んで創造主なる神から離れた。これこそ罪と死の起源であり，堕落の根は欲情であり肉の喜悦である。しかし，そのような神の超越と人間の神からの背反にもかかわらず，人間が神に近づく長い道程がある。それが知識の道であり，キリスト教はそれを示す「心の哲学」(66：4）である。ではそのような事柄を可能とするものは一体，何なのであろうか。グレゴリオスはそれを，欲情よりも，内心から湧き出て来る悪の行為よりも強烈な人間生来の善への欲求だとしている。それはアダムの堕落にもかかわらず，又，人間の pathē にもかかわらず残存する人間の本性的な善への傾向であると説かれている。このように生来，神の追求者として創造されている人間が，彼に与えられている知識の道を苦斗しつつ辿って遂に神へ帰還する。それは絶えざる斗いを通らねばならない上昇の道（anodos, anabasis)，止むことなき斗争（ponos, agōn, kamatos）であるとともに，憧憬と祝福の旅でもある。このような上への伸展と上昇の運動を止め得るものはなく，人間の意志が必然的に指向せざるを得ない神の意志，又，神の善に向う知識（gnōsis）を滅ぼし得るものはない。

こう述べて来ると，グレゴリオスがいかにも神の恵みを無視した人間中心主義者であるかのような印象を与えるかも知れない。しかし事実は決してそうではない。即ち，以上に述べたような魂の高挙と浄化，創造者なる神への帰還，その旅路における困難な，しかし同時に喜びに満ちた努力の一切は，神の寛容と祝福という基礎の上に立っているのであり，それはわれわれの苦斗でありつつ，御霊なる神の御業に他ならないのである。グレゴリオスは以下のごとく述べている。

「主が家を建てられるのでなければ，建てる者の勤労はむなしい。
主が町を守られるのでなければ，守る者のさめているのはむなし

い」。又，「彼らは自分のつるぎによって国を獲たのでなく，また自分の腕によって勝利を得たのでもありません。ただあなたの右の手，あなたの腕，あなたのみ顔の光によるのでした。あなたが彼らを恵まれたからです」。これはどういう意味なのか，それは主が高きより行なう者どもと連合して来たりたもうことを意味している。人間の努力というものは，その苦斗を通して栄冠を輝かせるものだと考えさせる必要はない。そうではなくて，人々をして神の御意志であるゴールに向う希望に注目させる必要がある。(1)

彼が強調している点は，神のもとから背反した人間が，生き生きとした神関係へといかにして立ち帰るかという体験における「神自身であるところの霊についての，それゆえにまた究極的な王たる権力であり万物に打ち勝つ現実であるところの霊についての，生き生きとした体験の告白」(2)に他ならないのである。われわれはここで，人間の救いにおける神の恵みと人間の業という De instituto Christiano の中心点に逢着したので，グレゴリオスの sunergia の概念を中心として考察の道を更に一歩進みたい。

2. sunergia の概念をめぐって

グレゴリオスの神学的立場は「神人協力説（synergism)」であろうか。又，そこで言われている sunergia にはどのような意味があるのであろうか。W. Jaeger は 24 の例を本文中から引用しているが(3)，一例を引くと，グレゴリオスの次のような記述がある。

永遠の生命と言葉に表わせない天的な喜びを与えるのは，御霊の恵みである。しかし，二重の努力をする愛（即ち，それは信仰の実で

註 (1) V.W. Callahan (ed.), St. Gregory of Nyssa, (Washington, 1967), p. 132

(2) カンペンハウゼン，三小田訳「古代キリスト教思想家 I」1963，173頁

(3) W. Jaeger, Two Rediscorered Works of Ancient Christian Literature, (Leiden, 1954) pp. 93-96

あるが）は，魂をしてこれらの贈物を受け入れ，恵みを喜ばせるのである。義の業と御霊の恵みとが同じ魂にともに来る時，魂はこの共同の助けによって祝福に満ちる。しかし両者が互いに離れ合う時，魂は何の得るものもない。何故なら，神の恵みは救いを拒む魂に入ることができず，人間の徳の力はそれ自体，恵みに与らない魂に生命の形を完成したり，上昇させたりすることがないからである。（46：26-47：11）

グレゴリオスは，完全は人間の努力だけで達成できるなどと考えていたのではなく，神の恵み（charis）と人間の努力（ponos, agōn）という二つの要素の調和を考えていたのである。では，これら二つの要素はどのような調和，又は sunergia の関係を持つと言うのであろうか。

この概念においてグレゴリオスの先駆をなし，sunergia という用語を最初に用いたのはアレクサンドリアのクレメンスであった。クレメンスは，医師と患者，教師と生徒，大地と農夫の例を挙げつつ，それは一つの結果を生み出すためにそれ自体では不可能なのであるが，あるものの協力によってその結果が生み出されるようになる協力の業を sunergia と呼んだのである。

グレゴリオスはクレメンスの受動的な概念を克服して，第一に人間は自分の力のみで救われず，イエス・キリストの受肉と贖罪の御業により，又，聖霊の御業によって救われることを信じた。しかも第二に，aretē, paideia, askēsis というような人間形成の概念が援用されるが，それらは皆，人間を漸進的成長を経つつ一段階一段階と成長させたもう神の恵みの業への参与という，積極的で前進的な意味を持つに至っているのである。グレゴリオスは，病気にかかって乳を受けつけなかった幼児が全快して食物を受け入れ，生き生きとした元気な子供に成長して行く例を引き，キリストの身長にまで成長するキリスト者生活（エペソ4：14-16）を説いている。勿論，グレゴリオスは身体の成長と魂の成長との相違を指摘

し，後者には愛の労苦が必要であることを強調する。それは理解を求める。

> もし人が祝福された生活に向って苦斗し，それに適わしい生活を作り上げることを望むならば，その苦斗の目標である神の御意志は何であるかを知る必要がある。(4)

それはキリストへの模倣へと誘う。

> さて，ある人が互いに深く結ばれようとするためには，模倣によって相手の人とともに歩む必要がある。それ故，キリストの花嫁としてその徳においてできるかぎりキリストの美にかなう者となりたい者もかくのごとくに心から求めねばならない。(5)

愛する者への信従と模倣は，相手の嫌う罪と悪からの絶縁と自己を喜ばせようとする心の否定を来らせる。しかしこのような苦斗も愛する者にとっては単なる苦斗ではない。

> 特に，神を愛する者たちにとって，戒めから来る苦斗はたやすいものであり甘味なものである。神に対する愛が斗いをやわらげこれを受け入れやすくするからである。(6)

確かにグレゴリオスの神学的立場をアウグスティヌスとの対比から考察したり，又，逆にペラギウス派との対比から論じたり，半ペラギウス的思想に類型づけたりすることも興味ある作業であろう。しかしそれ以上に重要なことは，グレゴリオス自身に充分語らせ，それを理解しようとする忍耐と謙虚とである。それなしには「神人協力」という概念でさえ，神の恵みプラス人間の努力というふうに簡単に図式化されてしまって，キリスト者生活の成長と完成という現実の諸問題において，「どうしたならば，神の恵みが空しくされないか」という点での，恵みによる恵みへの参与とい

註 (4) V.W. Callahan (ed.) St. Gregory of Nyssa, p. 132
(5) Ibid., p. 133
(6) Ibid., p. 150

う意味内容が明らかにされなくなってしまうのである。

3. 完全論の特色——特にその貢献面について——

以上，叙述して来たところを要約してニュッサのグレゴリオスの完全論の特色を論じたい。

先ず第一に，グレゴリオスが完全を静止した冷たい体系と到達点においてではなく，「泉のごとき深さを持つが，又，流水のごとき不断の活動」をもって「決して終ることのない神への遍歴」という力動性において考察している点を指摘したい。この力動性は理論的に割り切ってしまえないものを持っている。完全に向う旅は始源に帰る巨大で超時間的な宇宙的ドラマのごとくであり，しかも現実の生活での生き生きとした成長の体験である。苦斗でありつつ喜びである。知識でありつつ徳の問題である。個人の深刻な斗いでありつつ，教会の共同体的成長である。更に神の恵みでありつつ，人間の努力と業が恵みへの参与として意味を持っている。これらは緊張関係であり，同時に調和である。このような完全論の力動性こそ，グレゴリオスの完全論の中心であると考えられる。

第二に，グレゴリオスは，そのような生き生きとした完全への旅を，神への関係，特に愛において捉えた点を強調しておきたい。もう一度，グレゴリオス自身の言葉を引用するならば，彼は次のように述べている。

> あなたは主イエス・キリストが，救いのゴールへ又，完全なキリスト者たることへのゴールへ導くために，どのような道を指差していられるのを見るか。これこそ真理を愛する者にとって進むべき必要な目標であり，堅固な信仰と確固たる希望をもって喜びつつ苦斗せねばならない目標なのである(7)。

そしてグレゴリオスは「心をつくし，精神をつくし，思いをつくし，力を

註 (7) Ibid., p. 143

つくして，主なるあなたの神を愛せよ。……自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という聖句を目標として掲げている。グレゴリオスの神学の方法論的基本的態度は，確かにアレクサンドリア学派，特にオリゲネスに立ち帰るものであったと思われる。それにもかかわらず，彼の思想の最奥のものを動かしていたものは，神と隣人への愛であり，彼の完全論は愛の完全論と呼ばるべきものである。そしてこの愛という根本的概念こそ，前述の彼の完全論における力動性と調和とを解く鍵となっている。A.C. Outler は，この愛を disciplined love と呼んだ。(8) 確かにそれは労苦する愛，成育させて行く愛，一段階一段階と訓練し教育して行く愛，今日の現実を深刻に把えて打ち砕かれるとともに明日の約束された希望を指差す愛，禁欲と修道を自己満足に止めないで，神と隣人への奉仕に活かして行く愛である。

第三に，グレゴリオスの完全論の持っている「現在という時点」への強調を挙げたい。それは前述の通り，神の永遠的経綸に属する事柄でありつつ，現在，この生活と罪と弱さの真只中でわれわれにもたらされる神の救いの恵みである。彼はこの観点に立って実践的体験を強調したのである。

第四に，グレゴリオスの完全論の持つ「救いに対する希望的で積極的な考え方」を指摘したい。特に彼はキリスト者生活における救いの完成に対して楽観的である。それは決して人間中心主義から来る楽観論ではなく，神の恵みから来る救いの確かさと関連した希望なのである。

最後に，グレゴリオスの完全論を根底から支えている彼の聖霊論について述べたい。彼はその聖霊論を兄のバシリウスに負うている。彼はエウノミオスとの論争におけるごとく聖霊の神性を強調したが，聖霊を特に聖化に向って人間を絶えず教導する神として高調している点を忘れてはならない。

註 (8) A.C. Outler, op. cit., p. 10

この他，洗礼論と完全論との関連，修道生活と完全論との関係は興味深い問題であるがここでは割愛する。

以上，グレゴリオスの完全論の特色を，特にその貢献面だけを採り上げて述べて来たが，その問題点のいくつかは比較研究の項に譲ることとして，以下，ジョン・ウェスレーの完全論の検討に移りたい。（未完）

『神学と人文』文集，pp 50~61.（昭和42年，